

2021（令和3）年度 京都大学 入試問題 文系 第1問 解答例

- * 1行は、しばしば指摘されるように、25文字（+句読点）までがせいぜいでしょう。20字程度だと指摘する人もいますので、小さな字で過剰に解答しないようにしましょう。

問一

山崎という実在の人間に語られた一言は、筆者に自身の心の持ち方を初めて気づかせるほどの衝撃を与え、山崎という他者と一体化して筆者と関係し、内面に定着したから。

- * この設問では、「なぜ、忘れ得ぬ言葉となったのか」と、「忘れ得なくなる理由」が問われているので、ただ「衝撃を受けたから」という程度では、説明にならないであろう。解答の要点として、「定着する（忘れ得なくなる）」過程の説明がなければ、不可。また、「どのような言葉か」と問われているのではないし、「おぼっちゃん」もしくは「世間知らず」のここでの意味内容は、わざわざ傍線部（2）・（3）で問われているから、「世話になったのに云々」といった解答は問とずれている。

問二

「おぼっちゃんだ」という一言により、筆者は山崎の友情と自己犠牲を少しも意に介さない無自覚な利己心に気づかされ、その無自覚さ自体が悪であると思えてきたということ。

- * 前問一と、解答内容が重複していない点に注意。こちらで「山崎の友情と自己犠牲を顧みなかった自分の『罪』」への気づきを解答する。なお、「罪あること」の置換に、置換とは言えない「罪」の類を当てないこと。

問三

山崎の一言では、筆者は、過去に言われた、物質的、精神的な苦勞とは全く異なり、本質的な意味で人間の実在に触れ、その人間とつながることがなかったと理解したということ。

- * 「今度は」（以前とは異なり）という、多重構造の問いは京大ではことに多い。きちんと「Aは～であったが、Bは～」と、A・Bを解答に明記して構文化するのが基本である。
- * 「以前に言われた」意味での「世間知らず」とは、本文にある通り、「物質的にも精神的にもいろいろな種類の苦痛を」嘗めていないこと、一人っ子で甘やかされている（と友人などから思われている）ことであり、単なる人生経験の豊富さの否定ではない。

問四

忘れえぬ言葉は、書物では、筆者の特徴が次第に薄れ、抽象的な意味内容だけが自分の内面に混然と定着するが、実在の人間から語られた場合、その独立した他者と一体化し、実在的に内面に定着し、自分との実在的な人間関係を現わすから。

* 「全く別」という、単純な相違点説明であるから、前問三と同様に、多重構造の構文化をきちんと実行する。ここでは、「忘れえぬ言葉は、書物を通した場合には、～であるのに対して、実在の人間から語られた場合には、～である」という形式が必要。

* 相違点の最重要ポイントは、「言葉の意味内容だけ／言葉が人間と一体になって」である。「人間と一体になって」の要素は必須である。

問五（文系専用問題）

忘れえぬ言葉を語った実在の他者が、言葉と一体になって自分の内面に実在的に定着する本当の人間関係では、時を経てその言葉を想起する毎にますます他者は実感を増し、現実の生者との関係より、一層実在的に感じられるから。

* 「本当の人間関係」について、「生きているとか死んでいるとかいう区別を越えた」と言われるのはなぜか、という問いは、すなわち、「なぜ本当の人間関係は、生死を超えたといいうのか」という問いである。したがって、ここでの解答の構文は、「本当の人間関係は、～であり、(現実の人間関係よりも)～であるから。(だから、生死を超えている)」となる。間違っても、「生死を超えているから。(生死を超えている)」といった、「AだからAになる」というトートロジータイプのミスをしないように。